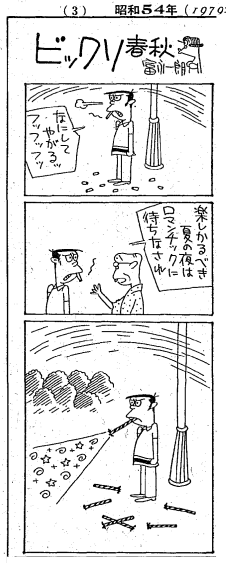
（3）　昭和54年（1979年）7月15日（日曜日）　上毛新聞　THE JOMO　（第3種郵便物認可）



「紫電改」34年ぶり浮上

愛媛久良湾
機体はほぼ原形
実弟（中之条出身・今井一雄曹）も作業見守る

34年ぶりに引き揚げられた旧海軍戦闘機「紫電改」

【愛媛】太平洋戦争末期の二十年七月、愛媛県南宇和郡城川町久良湾に撃墜し自爆した旧海軍最強戦闘機「紫電改」（紫電改のしんかい）でいた搭乗員の遺族らが花束を投げ入れ、冥福を祈った。

この紫電改は昨年十一月、地元の潜水業者中之条町出身の今井進・一雄ダイバーが発見した。二十年七月十四日、大村基地（長崎県）を発進、最後水準に来襲機と交戦した末帰還のまま行方不明となった第三四二航空隊（十九年十二月、松山で編成）所属の紫電改六機のうちの一機とみられている。

引き揚げられた「紫電改」は、一両日中の船上で、午前九時五分から愛媛県南宇和郡城川町東久良湾内で、クレーン船がワイヤをゆっくり巻き上げ、四十時、機体が浮上した。

三十四年間、四十二日の歳月に眠っていた機体にはフジツボがびっしり付着、赤茶けている程、折れそうになっている主翼には、くすんだ赤色の日の丸がくっきり。

近くの船から元同航空隊員の戦没者遺族参加隊員、遺族の武藤喜代子さん（今井一雄曹の姉）ら約十人が、花束を投げ入れ、冥福を祈った。

武藤さんは「弟は戦死の公報が入っただけで、遺骨も帰ってこなかった。今井さんが発見してくれたおかげで、弟の最後の様子がはっきりした。ありがとうございました」と感謝の言葉を述べた。

今井さんは「機体はほぼ原形をとどめており、引き揚げ後、修復すれば飛べるとのことだった。二十年七月